

牧師室から(2022.7.10)

何日か前に、アメリカにいる従妹からメールが来た。20代初めごろの私と小学生であった彼女自身と一緒に取った写真も添付ファイルで送られてきた。懐かしい！

彼女のお母さんは、私の母の一番下の妹である。その叔母さんは、結婚前から母が忙しい時はわたしの子守を頼まれていた。その叔母さんにおんぶされたときに感じていた叔母さんの温かい背中の体温を今も覚えている。当時、幼稚園の先生をしていた叔母さんは私と一緒に歌たり、絵本を読んでもくれたりした。ピアノを弾きながら歌っていた叔母さんがとてもきれいだったと思った。

そのようなこともあって、叔母さんが結婚した後も頻繁に遊びに行ったりした。叔母さんは二人の娘と一人の息子を産んで、今度は私が子守をして叔母さんを手伝ったりした。

アメリカにいる従妹はその叔母さんの長女である。勉強がよくできて叔母さんの自慢の娘であった。私と楽しく遊んでいたのに、いつからか遊びに行くと挨拶をするだけで、すぐ自分の部屋に行ってしまう出てこなかった。叔母さんは言った。「あの子は勉強以外には何もしないのよ」。困った顔をしながらも、飛び出している娘の学校の成績が嬉しそうであった。そのような叔母さんの期待通りに、名門大学・大学院を出て、アメリカのある大学の研究所に就職ができた。そして、そこで出会ったアメリカ人と結婚をした。相手が熱心なクリスチャンで、従妹も自然に夫と共に教会に通うようになり、洗礼を受けたようだ。それだけではない。夫が教えている大学の、世界各国から来た留学生たちを家に招いて礼拝を守り、聖書の学びをしているそうだ。毎週20、30人が集まり、クリスマスには50人位が集まったとも言った。

私たちが大阪にいる時に遊びに来たことがあって、何日かを共に過ごした。その時のことである。「お姉さん、何かやることない？」と言いながら、皿洗いをしてくれたり、掃除をしてくれた。身軽く動き回る彼女を見ながら「あなた、こんなこともできるの？」と半分冗談のように私が言った。「毎週、留学生の食事やおやつも私が作るのよ」と笑顔で答える。こんなに人が変わるなんて、不思議な気持ちさえした。教会生活や留学生との主にある交わりを語る従妹の姿が生き生きとしていた。

送られてきた写真の中の小さな女の子を見ながら、たくましい大人になったその時の姿を思い浮かべた。神さまの御導きは計り知れないものである。いつかは従妹のところにぜひ行ってみたい。そして、共に主を讃美し、おもちゃを持って遊んでいた従妹の手をしっかりと握って共に祈りたい。

(鈴木善姫牧師)